# 最終報告書レポート

コラボレーションの新しい可能性に向けて ―フィリピンをフィールドとするリサーチ・実験・実践―

## 1. 活動概要

フィリピン各所でインタビューリサーチを行い、対話の中で得たことを反映しパフォーマンス作品を制作した。アーティストや音楽家に限らず、多様な職業に携わる人たちをインタビューの対象とした。各々の職業とその環境、インタビュイー自身のバックグラウンドを知り、個別の状況と共通点を見出しながら彼らの目を通してフィリピンに触れることを心がけた。また、各所でワークショップを実施し、参加者がワーク内容をどのように解釈して取り組むのか、彼らと私の視点・思考の差異を互いに見つめ合う機会をもった。さらに、滞在中に数度パフォーマンスを行う機会があり、その都度リサーチから得た成果を作品制作に反映し実践を重ねた。なお、これら一連の活動の集大成としてパナイ島ロハス市で開催されたビエンナーレ「ビバ・エクスコン 2018 カピス」にてパフォーマンスを発表。

## 2. フェロー受け入れ機関グリーン・パパイヤ・アート・プロジェクト と 98B コラボラトリーとの協力体制、活動

グリーン・パパイヤ・アート・プロジェクトによる活動支援として、まずレジデンス・アーティストのリサーチ協力を担当するネオ・マエストロから、メトロ・マニラと周辺都市の美術館やギャラリー訪問への同行、アーティストやキュレーターの紹介などのサポートを得た。アート関係だけでなく、食事や物品の購入、危険地域の見極めなど生活に役立つアドバイスや情報も随時提供してくれた。ネオはアーティストであり、大学でドローイングの授業を受け持つ講師であり、アート NPO に勤務している。そのため交友関係が広くマニラのアート・シーンに対する知識も深い。良い批評眼を持ち、彼とのディスカッションはいつも示唆に富むものだった。
また、グリーン・パパイヤ・アート・プロジェクトの代表ノルベルト・ロルダンと同キュレーターのマーヴ・エスピナ、98B コラボラトリーのキュレーターのマリカ・コンスタンティノはそれぞれ「ビバ・エクスコン 2018 カピス」のアーティスティック・ディレクター及び共同キュレーターだったため、本活動の最終目標である同ビエンナーレでの作品発表に対し、6 月のリサーチから 11 月の上演まで長期に亘りマネージメントしてくれた。

## 3. フェローシップ活動記録

### 【1】活動一覧（主な活動）

### 1-1 インタビュー

※下記は主なインタビュイー一覧。このほか路上やマーケット、スラムで知り合った人たちとの対話がある。
※場所が市名だけのものは相手の指定したカフェなどで実施。

6/15：ラヴ・ディアス（映画監督），ヘーゼル・オレンチオ(女優、ディアス氏アシスタント)マリキナ
6/22：ラルフ・エイヤ（コミュニティベースのアーティスト、アクティビスト）マラテ
6/24：コリーヌ・デ・サン・ジョゼ（映画のサウンドデザイナー、アーティスト）マカティ
6/29：ジェーン・マリー・オブイェス（オーガニック農園の経営者）カブガオ
7/26：クレオ・アン・カリンバイン（デ・ラ・サール大学政治学准教授）デ・ラ・サール大学（マラテ）
7/31：キコ・ヌー（写真家）マカティ
8/ 6：コモン・グラウンド・ブックストアの書店員　同店（マラテ）
8/15：ジョーイ・メジアス（アーティスト）マカティ
8/30：ゼウス・バスコン（写真家）フィリピン文化センター（マラテ）
9/25：マラウィのミンダナオ州立大学講師　デ・ラ・サール大学（マラテ）
9/26：ディタス・ベルムデス（フリーランス・ライター、元新聞記者）マカティ
9/26：ジャヌス・ヴィクトリア（映画監督、放送局勤務、国際交流機基金アジア・フェロー）マカティ
9/30：墓地で生活する人たち（ジャヌス・ヴィクトリアのアテンドでリサーチ実施）メトロ・ノース霊園（マニラ）
10/16：メオン・カバルデ（弁護士、アムネスティ・インターナショナル・フィリピン副議長）
10/17：ジェイ・ジャビエ（写真家、ベニルデ大学講師）ベニルデ大学（マラテ）
10/19：キィ・エヤ（フリー・フォレスト・スクール・イン・フィリピンのファウンダー）パムラクラキンの森（ザンバレス）
10/23：墓地で生活する人たち　メトロ・サウス霊園（マカティ）
10/27：チャーリー・コウと地元アーティスト数名　ギャラリー・オレンジ（バコロド）
11/15：レイ・ティエンポ（米資本の広告代理店ワイ・アンド・アールのディレクター）サン・ジュアン
11/29：サル・テレグ（医師、神経学）保健省腎臓病センター（ケソン）

### 1-2 ワークショップ（WS）、アーティストトーク（T）

6/14-15：「ワールド・リスニング・デイ」（WS）　対象：バイオリンを学ぶ 10 代のスカラー　カーサ・サン・ミゲール（ザンバレス）
6/27：「ビバ・エクスコン 2018 カピス」プレイベント（T）　対象：ロハス市の地元アーティスト　アン・パヌビリオン美術館
9/ 8：「ザ・ファースト・クエスチョン」（T）企画・モデレーター：グエン・バウティスタ　ギャラリー・モノ・エイト（マラテ）
10/5：「シンク」（WS）　対象：アニメーション・美術コースで学ぶ 10 代の学生　フィラマー・クリスチャン大学（ロハス）
10/6 ：「イマジン」（WS）（T）対象：社会福祉、ビジネスコースの 10～20 代の学生　カピス州立大学ピラーキャンパス（カピス）

### 1-3 交流活動（ディスカッション、オブザーバー参加など）

7/4-8：「ヴァージン・ラボ・フェスタ」全上演作品鑑賞と若手シナリオライターとの交流　フィリピン文化センター（マラテ）
7/28：「テイスト・オブ・ヘリテージ」対象：新聞・雑誌記者や大学教授、NGO 従事者、会社経営者など様々な職種の女性たち：サン・アントニオ・ビレッジ（マカティ）
8/3-4：「ナママハイ//ホーミング」（ダヤン・イオラのキュレーション）ラス・カサス・フィリピナス・デ・アクザル(バターン)
8/ 9：クレオ准教授の政治学の授業（博士課程の授業）ディスカッションに参加　デ・ラ・サール大学
8/16：クレオ准教授の政治学の授業（学部生の授業）ディスカッションに参加　デ・ラ・サール大学

### 1-4 パフォーマンス、作品制作、コラボレーション

7/18：「ワールド・リスニング・デイ」アテネオ・アート・ギャラリー（ケソン）
8/29：「ザ・ファースト・クエスチョン」ギャラリー・モノ・エイト（マラテ）※インスタレーション(3 週間)とパフォーマンス
9/ 2：「第 12 回インターナショナル・サイレント・フィルム・フェスティバル」メガ・モール（マンダルヨン）
11/10：「ビバ・エクスコン 2018 カピス」　サーキュロ・コンベンション・センター（ロハス）
11/18：海洋生物のプラスチック被害の周知・意識啓発を目的としたミニ・パフォーマンス
　　※このパフォーマンスと私へのインタビューを編集した映像を後日リリース　サントラン・タウン・プラザ（サン・ジュアン）
11/20：オープニング・パフォーマンス　プロジェクト・オレンジ（バコロド）

## 【２】活動に伴う移動について（使用交通機関、宿泊について）

### 2-1 利用交通機関

・メトロ・マニラ：電車（NRT,MRT）、Grab（配車サービス）、タクシー、バス、ジープニー、トライシクル
・ルソン島メトロ・マニラ外：長距離バス（ヴィクトリー・ライナー、ザンバレス）、マイクロバス（運転手付きで手配、バターン）、地元アーティストの運転する自家用車
・マニラ⇔ロハス、バコロド間：セブ・パシフィック航空、フィリピン航空
・ロハス：トライシクル。バスやジープニー、タクシーより数が多く便利。長距離の場合は別車に乗り継いで目的地まで移動できる。なお Grab サービスはなく、カピス州内長距離移動の際は企画ごとに地元アーティストが移動をサポートしてくれた。

### 2－2 宿泊

・6 か月間の拠点：Airbnb の中で長期滞在対応可能な物件（SMDC グリーン・レジデンス：マラテ）を契約。水道代込み、電気代は使用量に応じた金額をコンドミニアムのフロントにある機械で随時チャージする。ネット接続は月極の固定金額を同機械で支払う。
・リサーチに伴う短期滞在：宿泊サイト（agoda など）を通じたホテル予約（ロハス）、Airbnb 利用(ロハス、ダバオ)、リサーチ協力者の自宅（バコロド）、企画協力者の持つ宿泊施設（ザンバレス）など。

### 2-3 参考

・参加予定だったミンダナオ島ダバオでの公演は、バコロド～イロイロまでボートで渡航し、イロイロ～ダバオ間をセブ・パシフィック航空で移動予定だったが、台風のためボートが全便キャンセルとなり、参加を断念した。なお、このボートのチケットを事前購入していれば、購入証明証を取得・提示の上マニラへのフライトの振り替えや返金を得ることができる（場合がある）。私の場合は事前にボートが出航するかどうかが不明だったため未購入、振り替え・返金は無く、バコロドーマニラ間のフライトを再購入した。
・滞在開始から 3 か月ほどは頻繁に NRT と MRT を利用していた。宿舎に据えていたマラテ地域の渋滞がひどく、ケソンやマカティに出る際、マラテからの出発に最も手間取り、通常予想移動時間の 1.5 倍～2 倍の時間が必要なため。実際は任意の場所まで電車移動した後、徒歩もしくは Grab などを組み合わせた。しかし、9 月のクリスマスシーズンに入ってすぐ、エドサ駅改札のセキュリティ入場を待つ間、バッグをナイフで裂かれてしまった。この一見以来、被害はなかったものの恐怖心が芽生え、その後は配車サービスを主に活用した。被害時は荷物が多く大小 3 個のバッグを持っており、別のバッグにも異変があったので何名かの犯行グループに囲まれていたのだと思われる（鉄道職員談）。9 月から年末にかけては犯罪も多発し、特に今年はこの前後からインフレが起こり、町の雰囲気が少し変化した印象があった。

・長期拠点となったマラテの SMDC グリーン・レジデンスは 53 階建てのコンドミニアムで、すぐそばのデ・ラ・サール大学に通う学生たちの多くが住まいにしている。建物内はセキュリティも良く、一階部分が小さなモールになっているので利便性もある。だが、マニラの気候を配慮すると気密性が高すぎてカビの原因となる。換気よりもエアコンの冷気で乾燥状態を保つ必要がある。（なおエアコンの使用頻度が電気代の多寡に直結する。）さらに、観光客向けの繁華街が近く多様な人たちが行きかうので地域全体としてみると治安はあまり良くない。海外で半年間の滞在場所を自分で確保するのは初めての経験だったため、入国前に 6 か月通期で契約してしまったが、短期契約で様子を見てから更新もしくは活動内容に沿ったロケーションで入国後に別所を探すのが良い。

## 【３】活動のプロセスと成果

フィリピンでの活動は、私が属するパフォーミング・アーツやコンテンポラリー・アートとは異なる分野の興味深い人たちとできる限り多く知り合い、彼らとのコラボレーションに向けた対話・実験・実践を模索することにあった。より強く・面白く・新しいコラボレーションを生み出すためには、私の携わる分野からなるべく遠く異なる必要があると考えた。重ならない部分が多くあればあるほど理解と解釈を通して学びが増えるし、誤解が思わぬ副産物を生む可能性も高くなる。
そうしてすべてのインタビュイーと新しいコラボレーションを模索するべく実験・実践が試みられることが理想だったが、リサーチの初期段階で、すべてのケースにおいてそれを実行するのは時間不足だと実感した。だからと言って、例えば、出会ったインタビュイーの中から一人を選び、その人とのコラボレーションに3～4か月を費やすのはこのプロジェクトのコアの部分と合致しないと考えた。その結果、多様なインタビュイーとの対話を積み重ね、そこから得た気づきや視点を滞在最終期に上演する「ビバ・エクスコン 2018カピス」でのパフォーマンス作品に反映することを大きな目標として再設定した。このパフォーマンスは地元のアーティストをパフォーマーとして招いて行うが、彼らにはリサーチの成果を共有し対話を重ねながら協働した。またギャラリー・モノ・エイトで行ったサウンド・インスタレーションや各所で行われたパフォーマンスなどでも随時リサーチで得たものを反映することを試みた。
以下、6か月の滞在期間を大きく3期に分け、主な活動を記載する。

### 3-1 滞在第1期（入国～7月前半）

＜フィリピンのアートのアウトライン、その一端をつかむ＞
グリーン・パパイヤ・アート・プロジェクトのレジデンス・マネジメント担当ネオ・マエストロの協力でメトロ・マニラ内のギャラリーや美術館を訪問し各所でアーティストやキュレーターと交流、マニラのアート・シーンのアウトライン、その一端を捉えていくような時間をもった。想定していたインタビュイーはできる限りアートから離れた分野を希望していたが、ネオと共に作品鑑賞しそこで出会う人たちとの間に起こる会話を共有しながら、リサーチの進め方を彼とすり合わせることに努めた。
フィリピンの美術の世界では絵画の重要度が高い。特に地方都市ではアーティスト＝画家という理解が主流で、例えばパナイ島のロハス市でアーティストだと自己紹介すると10人中10人が「どんな絵を描いているのか？」と尋ねてくる。フィリピンのアートを一面的に捉えることは避けるべきだが、そのアイデンティティはやはり絵画の中に見出すことができると思う。あくまで私見だが、世代や分野を問わず「何を美とするか」の判断ポイント、美意識の持ち方が、多分に絵画のそれに依拠していると感じる。
また、大小かなりの数の美術館とギャラリーをこの第一期に巡ってみて、コンセプチュアルで抽象度の高い作品も目にしたが、多くの作品は読むように鑑賞することが可能で、メッセージが明確なものが多い。絵画に限らず、広く芸術表現が言語的であるところにもフィリピンならではの特徴を感じた。それを顕著に感じたのは6/27～7/15にかけて開催されていた「ヴァージン・ラヴ・フェスタ」（フィリピン文化センター）。今年14回目を迎えたこのフェスティバルは、シナリオ審査を経て採用された未上演の演劇作品15作がそれぞれ1時間程度で上演され、1プログラムで3本鑑賞することができる。タイトルのラヴ（LAB）はラボラトリーのことで、次世代のシナリオライターを養成するプログラムを期間中も開催し、フェスティバル初上演の作品と合わせて新しい才能を後押しするインキュベーションの役割を担う。全上演作品を鑑賞したが、使用言語の90%がタガログ語で英語字幕は無い。コンペティションの形態（シナリオ選考）と上演時間1時間という規定上、セリフの多用が全作品に共通していた。劇場で偶然居合せたフィリピン人の友人が休憩ごとにたった今見終わった作品の解説をしてくれたことがあったが、予想以上にセリフ外から文脈をつかむのが困難であることが分かった。フィリピン以外の国と地域で作られた演劇の鑑賞経験と比較すると、それらも言語を多用しているが、言語とは別のレベルで感得できるところを比較的広く備え、それが鑑賞の多層性を与えていると思う。フィリピンの演劇に詳しいライターにもヒアリングしてみた結果、このフェスティバルに限らず、言語量の多さはフィリピンの演劇の傾向として認められるようだ。
一方、マニラの若い世代（20歳前後～30代後半）のアーティストの作品を、彼らが活躍するコンテンポラリー・アート、音楽、映像、ダンス、演劇といった分野で広く見渡してみると、テーマや手法の採り方により広がりを見て取れる。素材の性質にフォーカスし、制作先行で後から（プロセスから）コンセプトを導き出している作品や、社会を俯瞰してテーマを見出すのではなく個々人の置かれた環境や指向･視点が結果的に社会状況やコミュニティが共有するテーマへとつながっていくような例を目にすることが少なくない。また、かれらが活躍するこれらの分野は、それぞれのシーンごとの規模が決して大きくなく、横断的な交流も頻繁に行われている。アーティストたちと話すと「一緒に育ってきた」という表現を何度も聞いた。自然に価値観を分かち合い、影響し合う様子が素材の選定や制作手法、コンセプトから感じられる。

＜ラヴ・ディアス監督とサウンドデザイナーのコリーヌ・デ・サン・ジョゼ＞

芸術表現における言語的要素に対置するような経験を求めていたとき、フィリピン独立記念日（6/12）にラヴ・ディアス監督の最新作『悪魔の季節』（2018）を鑑賞する機会を得た。登場人物たちがアカペラでセリフを歌う「ロック・オペラ」仕立てだったこともあるが、画面に見えているものを登場人物の歌唱が常に裏切っていくような軽やかさと多層性、光と音の透明感に強く惹かれた。また、その後見た『立ち去った女』（2016年）、『北(ノルテ)—歴史の終わり』（2013）にも言えるが、テオ・アンゲロプロスや溝口健二に通じる神話的な示唆と透徹したリアリティが生むスケールの大きさ、教条的なところがなく行間を積極的に読み込ませるために存在するようなセリフも魅力的だった。

上映から3日後マリキナ市でラヴ監督にインタビューを行った。ロック・ミュージシャンでもある監督はギターを弾く動作を見せながら「音の無限性を求めても、ここでフレットが終わってしまう」けれど、「映画と音楽がもつ制約を愛しているし、人生こそがそもそも限られている。人生は制約に対する挑戦そのものだと思っている」と、カメラを引けば引くほどフレームの中に取り込まれていく人間のつながりをどれだけ豊かに取り込めるのかを常に考えていると話した。彼の作品はフィリピンのある時点・ある土地にフォーカスしているが、画面に現われるのは人間が普遍的にもつ問いや、人生・宿命に対峙する人間の強く弱い姿であり、映画を見ている私たちすら時空を超えてフレームの中へ取り込まれていく。すべてが関連し合っている状況を描くことは、監督の社会に対する視野の広げ方とアーティストとしてのアティテュードに直結する。「現実の世界でも、例えば東南アジアの人々は常に“ストロング・マン”を求めているなどと言われるが、そのように単純な話ではない。歴史が作り出した様々な機能不全がつながり合ってその状況を生み出している」「渦中にいる私たちがその複雑さを解き明かし、どのような正義を追求しそれに従うべきか、長い道のりと葛藤の中にある。その基礎となる大衆の教育がフィリピンには欠落している。音楽も映画も文学も各々のメディアを用いてそこに従事する役割を担うべきで、責任がある」。

『悪魔の季節』上映後 Q&A の様子

インタビューが進むにつれ、様々なトピックに通底するキーワードとして「コミュニティ」に話が及ぶ。監督は自身の家族の話も交えながら、フィリピン経済の内需を支える海外からの送金＝親が子供と遠く離れて生活する状況が、フィリピンの子供たちの人格形成に与える影響を危惧していた。フィリピンでは元来個々人とコミュニティが強く結びつき、その基本単位である家族のつながりの弱まりはとりわけ子供たちに影響を与え、長く改善されていない大きな社会問題であると指摘した。後述するが、このインタビューで得た「コミュニティ」「大衆（とはだれを指すのか？）」というキーワードが、その後のリサーチに大きな影響を与えた。

インタビュー後、彼の作品のサウンド・デザインを担当するコリーヌ・デ・サン・ジョゼと会うことを勧められ数日後にインタビューを実施できた。

コリーヌのサウンド・デザインは、国内のいくつかの映画祭で音響部門の最優秀賞を受賞するなど年々評価を高めている。特にラヴ監督作品では、4時間にも及ぶ作品に必要な集中力を彼女の音が引き出している。コリーヌはデ・ラ・サール大学でアートを学び、現在はシルバーレンズ・ギャラリーに所属するヴィジュアル・アーティストでもある。フィリピンで最も大きな音響制作会社の一つラウドボックスに勤め、インディペンデント作品に関わることが多い。彼女は制作プロセスと作品そのものを見渡せるインディペンデント作品の規模感を好むそうだ。彼女の音響とビジュアル作品は、いずれも、常に地と図の主従を入れ替え、私たちの感覚を固定させないところに魅力がある。結果、彼女の視覚作品は音を聞くような時間の中で鑑賞することができ、一方音響は目で見るような空間性を伴って味わうことができる。実際ラヴ作品を観た人に尋ねると、彼女の音響の優れた点を視覚的に形容する人が多いのは、彼女のビジュアル・アーティストとしてのセンスが活かされた結果だと思われる。

＜ギャラリー・モノ・エイトでのグループ展参加決定＞

ギャラリー・モノ・エイトのオーナー、カルロ・レイエスが私の声を聞いて8月のグループ展参加を即決し、サウンド・インスタレーション、オープニング・パフォーマンス、アーティスト・トークを行うことになった。本フェロー活動のテーマ「異分野とのコラボレーション」を模索するにあたり、この展覧会は自己紹介の場として提示できると考えた。どのようなことに関心をもち作品を制作しているのかを具体的な作品として提示し、インタビュー対象者との出会いや交流を促進する場を設けることも意図した。

この作品では、外＝日本から訪れている私が見る・聞く世界は、フィリピンの人たちにとっては“ネガティブ・スペース”として無意識に“無いもの”として処理されているかもしれず、そこを作品に反映しようと考えた。これはラヴ監督とコリーヌへのインタビューが与えてくれた示唆に基づく。この作品制作に伴い、フィリピンの人たちの音の聞き方に関するリサーチを始めた。

アーティスト・トークの告知

＜ロハス・シティでのリサーチとアーティスト・トーク＞
11月に参加する「ビバ・エクスコン2018カピス」に向けて第1回目のリサーチと現地アーティストを招いて行うアーティスト・トークを行った。今年の「ビバ・エクスコン」の芸術監督ノルベルトは現地のアーティストに「アートは絵画のことだけを意味しない」と檄を飛ばし、外部から参加するアーティストに対して「できる限り新しい経験、新しいメディアに触れる機会を作り、アートの概念を広げたい。現地アーティストとコラボレーションすることが必須条件」と何度も確認していた。彼は70年代後半に「ブラック・アーティスト・オブ・アジア」というポリティカル・アート・グループを結成し、美術館やギャラリーとは異なる新しいサイトを発見し新しいアートを発信するムーブメントを担ってきた。彼にとって故郷のロハス市でアートの多様性を拓くことは本願であったと思う。
4日間のリサーチにより、ロハス市中心部を流れる蛇行河川（パナイ川）の様子から時間の不可逆性と過去から未来に至る時間の変遷をテーマとしたパフォーマンスを制作・上演することを決定した。アーティスト・トークでは、これまでの作品紹介と声のデモンストレーションを行った。さらに、声のテクスチャーが私の身体の特徴や各部位の使い方と密接な関係を持っていることを解説し、参加した地元アーティストがほぼ全員ペインターだったことから、異なるメディウム（例えばLEDライト）で描くことにより身体の用い方が変化すること、描く身体そのものがパフォーマンス作品として提示できることを伝え、コラボレーター（パフォーマンスの出演者）を見つける足掛かりとした。

アーティスト・トークにて

## 3-2 滞在第2期（7月後半～10月前半）

＜ワールド・リスニング・デイ＞
サウンドスケープの提唱者でカナダ出身の音楽家マリー・シェーファーの誕生日（7月18日）には、世界各所で「ワールド・リスニング・デイ」と称したイベントが開催される。音を楽しみ、深い聴取によって自分を取り巻く環境や社会への理解を深めることを目的とし、コンサートやフィールドレコーディングなど、どんな方法でも、たった一人でも実施・参加することができる。2018年はフィリピン在住の作曲家テレサ・バルーゾがワールド・キュレーターとして「フューチャー・リスニング」というテーマを掲げ、音にまつわる過去の記憶や現在の自分の環境を顧みるようないくつかの問いをウェブサイトに掲載した。フィリピンでは、女性たちのアートグループ「ヘレシー」のプロデューサー・フランチェスカ・カサワイとジョーイ・メジアスがテレサとコラボレーションし、ザンバレスにあるカーサ・サン・ミゲールとケソンのアテネオ・アート・ギャラリーでワークショップ、ショーイング、コンサートを「ワールド・リスニング・デイ」イベントとして実施した。

バイオリン・スカラーたちとのワークショップ

▸カーサ・サン・ミゲール（ワークショップ、ショーイング）
私もこの企画に招待され、カーサ・サン・ミゲールではバイオリニストを目指す10代半ば～18歳のスカラーたちに音と身体の結びつきを深めるワークショップを実施した。彼らが「スカラー」と呼ばれるのは、才能を認められ無料でレッスンやコンサート遠征などの機会を得ることができる立場にあるためだ。この施設は1991年のピナトゥボ山噴火の後、アメリカで活躍していたバイオリニスト、アルフォンソ・ボリパタによって1993年に設立された。才能を認められた10代の若者たちには、バイオリニストもしくはアーティストになるためのレッスンやプログラムが無料で提供される。運営はスターバックス・コーヒーなど、グローバル企業等の支援によって成立している。火山噴火後、その当時はライフラインの供給・復旧など、生活基盤の支援が急務とされ、ボリパタの始めたアートを通じた復旧支援には疑問の声も挙がったという。しかし、噴火から27年を経た現在でも続いている支援活動はこのカーサ・サン・ミゲールぐらいだと聞く。

ワークショップでは、音や声を振動・物理現象として捉え、手で何かに触れるように音に直截性を持たせるワークや、音はもとより、その表現内容がいかに相手に届かないかを実感し方法を試行錯誤するようなワーク、音を図像化するワークを行った。

翌日はメトロ・マニラをはじめサンバレス州内外から60人余りがショーイングに集った。私のソロパフォーマンスの後、12名のスカラーたちとワークショップの学びを取り入れたコラボレーションを行った。彼らは一人ずつ登場し、ペアを作って三種類の音を交互に奏でる。その3音は「会場の外から中へ届く音」「ペア相手の音に返答する音」「未来の音」で、各音5秒以下という制限を設けた。全員がこれら3音を演奏し終え会場内の任意の場所へ散らばった後、私たち13名がピッタリとタイミングを合わせた1音を奏で暗転。暗転後は、それぞれの音を聞きとりながら、ひとつのサウンドスケープを暗闇の中で作り上げていった。彼らには前日の体験を色に例えさせ、その色彩のイメージを音で表現し他の音との混色／コンビネーションを楽しむことを試みてもらった。サウンドスケープの終焉に合図は設けず、お互いが「今だ」と思う瞬間にもう一度ぴったりとタイミングを合わせた1音を全員で奏で演奏は終了した。これが彼らにとって初めての即興演奏だったと後に知った。

Wednesday, 18 July 2018
Daily Tribune

LIFESTYLE

DURING World Listening Day at CASA San Miguel, a deceptively of sounds taught audiences how to listen.

By Dixie P. Barrozada, Contributor

# Stop and listen

"Papa, please stop at the nearest 'CR,'" says the 21-year-old Mining Engineering graduate to the man behind the wheels, just a decibel higher than a whisper. The family is just 40 minutes' drive away from their destination. Everyone in the car perks up from varying degrees of drowsiness.

"Look for the nearest Jollibee," commands Environmental Engineer mom.

"Can the restroom, but don't buy food from that place," adamantly declares 18-year-old Food Technology student and second eldest daughter.

"Are we getting lunch there, too?" asks the day's designated driver.

"One kilometer away is a gasoline station that claims to have clean restrooms," calmly announces one of the two family friends on the trip, eyes still on smart phone.

"It doesn't have to be Jollibee, does it?" civil engineer dad tentatively chortles to no one in particular.

An almost inaudible sigh is heard and then a remark, "It's just because it is highly unlikely to find any other place with a decent CR nearby."

All too soon, the car pants up at the parking space right next to the purported "clean CR." And before anything else could be said about what just happened, the SUV turns left at the sign that reads "Fundayo."

The mother box of the group sagely decides, "Lunch first before the tour."

No one disagrees, so after the requisite admission sign-up and other formalities, menus printed on bamboo paddles are passed around after tables are rearranged to accommodate the family plus two friends.

A cacophony of voices renews as the newly-frazzled server tries to answer queries about whether "cheese pizza" and "cheese pizza overload" means the latter has varied types of cheese toppings or that the "overload" just means it has more cheese; about which pasta dish is crustacean-free; and much later, after 13-year-old daughter (the youngest in the brood and obviously everyone's favorite) pounces her "leftover" soup to daddy, whether it is all right to order just half a cup of rice.

All of this is nearly drowned by the tuning of violins spilling out of the Roman Corpus Hall ground floor entrance; the incessant singing of a bell calling out to the nearest available waiter; and the steady, if a bit above white noise level, drone of Buckingh Cold's air-conditioning unit.

## World Listening Day

By the time the World Listening Day (WLD) 2018 event in CASA (Center for the Arts in San Antonio) San Miguel opened with an introduction by writer/poet Francheska Cabanay, the group has had its fill of exercise in listening, albeit unintentionally.

Presented by the 24th CASA San Miguel Season in cooperation with Jagna Fragrancing Manila, the collaborative WLD 2018 with Kasapi and the Pandayan Tartanas opened a world of possibilities for reflecting on the questions posed by WLD 2018.

Themed "Future Listening," which, according to Barrozada, "calls for reimagining a personal and universal future through listening," WLD 2018 participants are "encouraged to examine their hopes, dreams, ambitions and fears for the future and reflect on the question, 'What does your future sound like?'"

Similar to events planned across the globe, the CASA San Miguel activity had members of the Pandayan Tartanas take part in "imagining sonic possible worlds and the future of acoustic ecology" through sound walks and field recordings that they shared with invited guests to the curated sound presentation Nov. 15 July.

"Future Listening," according WLD 2018 organizers, ultimately aims to engage the world in opening its ears to the present and to acknowledging the immense capacity of the act of listening in shaping our collective future; thus, questions posed are: What does your past sound like? What does your present sound like? Which sounds do you wish to retain? Which sounds do you wish never to hear again? Which sounds do you consider as toxic waste? How does silence and noise sound in your future? Which sounds have silence? Can you will hear?

## Sound of silence

The challenge thrown to the audience at CASA San Miguel Sunday created quite a stir even as curiosity and trepidation hung a certain sense of feeling unsettled long after the performances showing forces fiddling with or plucking strings, violin bows and knocking on the body's inner bent as creators to Tamanaka's primal events.

The 39-year-old to the group would have an immediate "Ah," was surprised, then pressed, then tempted the viol, an amused [illegible] taken aback. A few and amused, [illegible] are well-rehearsed.

"What does your future sound like?"

A whole lot more member members of the group celebrated to explore sounds which our senses were taught to ignore. Instead like curated chimes, we pondered subtleties of color and harmony, to which our senses haven't customarily gravitate. That's why I was glad [illegible] was a response to the invitation to do an exercise of they were playing outside the concert hall which, unbeknownst audiences, was really part of the entire program, in the field of

The youngest in the group couldn't help but say, "Sorry ma'am, we have forgotten how to dance. And it is one of the things should know how to do well. And, listening is always is part of

"Thousands of people from six continents live tuned into Listening Day every 18 July (with related events spread the date by inception in 2018.

World Listening Day 2018 Philippines will have a digital branch of online about listening tracks reflecting on the "Future Listening" from selected Filipino participants on 18 p.m. at the Balboa B. Lazatana Lobby of ARETE, Ateneo de Manila University, Loyola Heights, Quezon City. There will also be live [illegible] exercises by Teresa Barrozo, Francheska Cabanay, Jose Mojica, Veronica Deluyo, Ami Yamasaki and Yuko Nexus.

THE Pundaw Wilsuki

ショーイングの様子を伝えるタブロイド紙

来場者との質疑応答では、今この瞬間自分を取り巻く環境を聴覚によって感受することの奥深さについてマインドフルネスと関連付けて話してくれた方や、そういった音との対峙の仕方が日本文化に根差したものかどうか、何が現在のフィリピンの社会や文化に足りないのか、など、音を入り口に様々な意見交換がなされた。聴覚が織りなす世界は、その人が属する社会や生きている世界をどのように捉えているのか、その感覚や心情の総体など内的なものと深く通底し、外的な経験・コミュニケーションを方向付ける要素の一つなのだと改めて感じた。

会の最後には会場のリクエストを受けてスカラーたちがヴィヴァルディの『春』を演奏した。6月の打ち合わせで聞いたときとは全く異なりふくよかな響きに成長していた。演奏後にそのことを興奮して伝えると、私の声を鳥に例えて「鳥がやってきて、一緒に春になった」とスカラーの一人が伝えてくれた。

なお、このイベントには様々な職種の来場者を得ることができ、このイベント以降、多様なインタビュイーと出会うきっかけを作ってくれた。

▸アテネオ・アート・ギャラリー（パフォーマンス）

マニラではワールド・リスニング・デイ当日、女性のアーティストグループ・ヘレシー主催でアテネオ・デ・マニラ大学に新設されたアテネオ・アート・ギャラリーを使用したイベントを開催した。テレサをメインクリエイターに迎え、日本からYuko Nexus 6と私、マニラ在住の女性ミュージシャン3名の計6名が出演した。

6 名の女性ミュージシャンによる演奏

まず私が3階まで吹き抜けのロビーと回廊を使い、１～3階を未来～過去の時間軸に見立て螺旋階段を下りながら声を発し、回廊の構造と建築資材が作る複雑な反響を活かしたソロ演奏を行った。次にYuko Nexus 6が釜ヶ崎のサウンドウォーク録音と詩の朗読を交えたレクチャーパフォーマンスを披露。最後にテレサの指揮で“フューチャー・リスニング”をテーマに彼女が構成した作品をフランチェスカ・カサワイ、ジョーイ・メジアス、Yuko Nexus6、ポリーン・ヴィセンチオ-デシピと私の5名で演奏した。各々が未来の音を表現するために用意した様々な電子音や各種エフェクト、過去の録音、サウンドスケープ、物音、声などが交錯する演奏だったが、終盤は3分以上の静寂を設け、来場者と共に会場内外の音に耳を傾ける時間を作った。客席も工夫してステージとの境界を曖昧にし、誰もが音の風景の当事者だと感じられるような場が作られていたと思う。

＜政治学者へのインタビューと学生たちとのディスカッション＞

▸政治学者クレオ・アン・カリンバインへのインタビュー

クレオはデ・ラ・サール大学で教鞭をとる政治学の准教授。研究領域は東南アジアの政治（主に制度・選挙の歴史と現状）で、フルブライト奨学金を授与され数年前まではアメリカ、イギリスで研究していた。クレオはカーサ・サン・ミゲールで行われたイベントに来場し、終演後に声をかけてくれた方の一人だった。彼女は「ノイズ」「サイレンス」といった音にまつわる言葉を比喩として用いながら、不正確な認識や誤った情報（ノイズ）に左右されず、できる限り正確な情報を収集しながら冷静な目をもって判断できるように自分を保つこと（サイレンス）が、フィリピンの政治の現状に対峙する国民のアティテュードとして求められていると話してくれた。また、よりよい社会を志向し他者の受容にフィリピンが開かれていくべきだとすれば、コミュニティの概念や範囲はどこまで・どのように拡張することが可能だろうか、サポーティブな国民性をよりよく活かせるコミュニティの在り方とは？と、コミュニティ論にも話が及んだ。クレオは、国民が最もダイレクトに政治参加できる選挙を特に重要視しており、選挙教育をテーマに自身の学生たちへ課題を与えている。

▸デ・ラ・サール大学クレオ准教授の政治学授業参加と学生たちとのディスカッション

１．8月9日　博士課程研究（中間発表）のオブザーバーとディスカッション参加

クレオ准教授の博士課程クラスには4名の学生が所属し、そのうちの3名がすでに国内の異なる地域（ミンダナオ島、ネグロス島）の大学・学校で教鞭をとっている。この日は前半の90分で1名の学生がデモクラシーの意義と歴史的背景をテーマに西洋・東洋の研究者による言説の比較をプレゼンテーションした後、クレオ准教授の指導の下、学生全員でディスカッションを行った。後半の90分は私もディスカッションに参加した。この場で最も興味深かったのは、ミンダナオ島マラウィで教鞭をとる博士課程の学生とのディスカッション。マラウィは2017年5月下旬に発生したイスラム武装勢力による占拠及び政府軍との衝突以来、同年10月の終結宣言を経た現在も戒厳令下にある。前半90分で議論されていたフィリピンにおけるデモクラシーの歴史と現状の認識に紐づき、

-フィリピンにおいて、より良いデモクラシーの実現に不可欠となる意識の共有や連帯の礎となるであろうコミュニティの在り方はどのようなものか。今年7月下旬に成立した「バンサモロ基本法」により、高度な自治を認め予算の立案・執行権を有するバンサモロ自治政府がミンダナオ島に設立されることでどのような変化が起きるか。

-首都マニラから遠く離れ、異なる宗教・文化を持つミンダナオから国家や政治を見たとき、同島の人たちはどのような相違・隔りを感じているのか。デモクラシーの観点からミンダナオにもたらされるべきものは何か。ミンダナオが国に対してできることは何か。

といったことが議論のテーマとなった。有人島だけでも1000を数える群島国家フィリピンにおいて、一つの国家として何らかの共通意識をもち国としての将来像を共有するのは、ひと際困難だ。国家の概念そのものをマルチプルに捉えて、それぞれの地域の現実に即した自治の下に緩やかな連帯を持つ可能性についても話し合われた。そして、政治やシステムが理にかなうことが、産業・経済にも好い影響を与え得るのではないか、身近な生活の変化が意識の変化にもつながるのではないか――明確な答えを出すには至らなかったが、議論のテーマを導き出していく過程そのものがクリエイティブだった。

２．8月16日　学部生たちのリサーチ発表にオブザーバー参加、質疑応答

早朝から7:30-9:00、9:15-10:45の2つの授業に出席し、学部生たちのリサーチ発表を聴講し質疑応答を行った。学生たちは5, 6人のグループに分かれ、フィリピンの地方自治最小単位である「バランガイ」（50～100世帯の集落）の調査を行った。フィリピン国内には４万超のバランガイがあるが、学生たちはそれぞれ任意のバランガイを複数選び出し、学校や病院の数/犯罪件数/公共料金/中心産業/失業率/平均年収/消費者物価指数といった指標を用いて、対照的なバランガイを2か所ずつ並べて比較し、そのコントラストから問うべきテーマを導き出していた。後の授業では、各バランガイの特徴に適した選挙教育の方法について引き続きグループワークが予定されている。

私から学生たちに投げかけたいくつかの質問で最も活発な意見交換がなされたのは「地区間の格差を是正し、地域を俯瞰してグランドデザインを行う省庁やテクノクラートのような人材は存在するか」だった。フィリピンでは政治も経済も一部の支配層・富裕層が彼らの家系を存続させながら長い間強い権利・権限を保っているので、社会を変え得るようなアイディアを発想しても行き詰まってしまう場合が少なくない。学生たちは、そういった実情を踏まえた上でフィリピンの特殊性に沿った社会・環境のバランスのとり方、平等性といったものについても意見を交わし、より良い社会を作るために何ができるかを真剣に考えていた。政治学専攻生たちの卒業後の進路は、ロー・スクールに通い弁護士を目指すケースが多いが、大学院に残って研究を続けたり、実際に政治に携わる可能性のある学生もいると聞いた。

＜8月29日　サウンド・インスタレーション『ザ・ファースト・クエスチョン』＞

この作品はフェロー活動の前半3か月間に実施したインタビューやミュージシャンたちとのコラボレーションから得た、音や聞こえに対するいくつかのスペシフィックな問い：「フィリピンの人たちはどのように音を聴いているのか、どんな音を無意識にマスキングしているのか」「フィリピンの“典型的”

『ザ・ファースト・クエスチョン』展示風景

なサウンドスケープとはどのようなものか」「パブリックな場で聞こえる人工的な音がかなり大きいのはなぜか」をコンセプトに据えた。
インスタレーションの機構のうち、録音声の再生にはオーディオ・スポットライトという特殊なスピーカーを用いた。再生音がレーザー光線のような強い指向性を持ち、壁面や天井に反射した音が音源から離れた場所で音像を現す。これは私がライブ・パフォーマンスで発声するときの状況を再現するため、さらには、音源と音像の場所を一致させないことで、聴取者の身体性をより強く意識してもらうため。なお、再生されている音源は、何かの始まりを意識させる音（オーケストラのチューニングや人が水に飛び込む音、鐘の音や時計の秒針など）をカットアップしたものと、水を探す女性の文法が定まらない日本語のつぶやきからなる。人類が最初に発した質問は、私たちの生命維持に欠かせない水にまつわるものだったのではないか？という推測に基づき、水にまつわるイメージを聴覚・視覚両面に取り入れて構成した。
ギャラリー内に元からあるバスタブを利用した部分では、天井部に近い蛇口から出た水がいくつかのキャンバスでろ過され、最後は綿糸を伝ってプラスチック・ボールの水面に水滴を落とす。注意深く耳を澄ますと水滴の生の音を聴くことができる。この構造は、外部からの情報が脳で処理されて言葉に置き換わり、それが発声されるまでのプロセスを模し、さらには＜質問するDNAの獲得⇒脳内での質問の言語化⇒質問を音声として外部へ発しコミュニケーションを起こす＞という人間が得た能力の変遷も加味している。（参考文献:ジョーゼフ・ジョルダーニア著『人間はなぜ歌うのか？』）
このギャラリーは、多くの観光客が訪れる歓楽街に近いため、時おり外の音にかき消され作品の音世界に没入することはできない。しかし、だからこそ普段聞き流している音に改めて耳を傾け、鑑賞者の生活の延長に作品の音を据え、個々の聴覚の在りようと身体性のグラデーションを意識しなおすには理想的な環境だと思う。私の聴取方法を反映した作品を提示することは、私以外の人にとっては“ネガティブ・スペース”として無視される音・音響の再提示だと思って取り組んでいたが、実際の展示を通して得た感想にはこの音環境に対する親近感や既視感を伝えてくれた鑑賞者も多く、聴取及びそれに伴う身体性の共通点と相違点のさらなる発見がもたらされた。

＜対話の方向修正、気づきの具現化に向けて＞
▸市民と大衆
最初のインタビュイーとなったラヴ・ディアス監督から得たキーワード「コミュニティ」「大衆」という言葉は、コラボレーションを可能にする前提事項を問い直すきっかけを与えてくれた。また、それと呼応するように、第2期の序盤「シネマラヤ」に合わせて来比中だった国際交流基金の鈴木勉氏へのヒアリング、鈴木氏から推薦された現代フィリピン研究の第一線を担う日下渉氏の書籍から、富裕層を除くフィリピン国民を「市民」「大衆」として分類する視点を知った。
インタビュー以外の場所でこの定義について様々な人たちとカジュアルにディスカッションする場をもった。市民と呼ばれる階層には、その上に位置する富裕層や代々政治を担う名家らの利益獲得とその存続を目的とした恣意的な政治と経済に長年振り回され反発心を持っている人が少なくない。さらに、自分たちの下の階層＝大衆とも明らかな断絶があり、彼らこそが富裕層の利益温存を助長していると問題視している。それが最も顕著なのは選挙キャンペーン期間だ。貧富の差に関わらず同じ一票の重みをもつ大衆層は、選挙候補者が票集めのために与える金や食料といった目先の利益に左右され、中長期的な視点で候補を選ばない、彼らは倫理的・道徳的に教化されるべき対象で、自分たちを板挟みのジレンマに置く「内なる敵」、といった考えが言葉こそ違えど市民層から聞こえてきた。さらに、ドゥテルテ政権の誕生は、富裕層・為政者たちの名家が作り続けてきた恣意的な政治と経済状況をドラスティックに打ち破るシンボリックな政治家として、市民と大衆双方から期待されたのではないか、でなければフィリピンの楽天的・享楽的な国民性があのような厳しい規律を求めるとは思えない、といった分析も聞かれた。
これらを受けて、以降に行うインタビューでは、「市民と大衆という概念をもっているか」「コミュニティをどのように定義し、そこに含まれるのは誰か」を必ず問うようにした。インタビュイーの携わる職業は各々に何らかの社会貢献を伴うが、前提として彼らの対象が「市民」に限られていないかを問うことは、多様性が暗黙のうちに誰かを排除することで成立していないかを問うことであり、コラボレーションやコミュニティという概念が内包するある種の欺瞞に光を当てるのではないかと考えた。これは、日本では得難い視点だと思う。
だが、そもそも、人からの紹介やパフォーマンスの上演などを通じて知り合うインタビュイーも、半年のフェロー活動の間にできた友人たちも市民層に属している。私がフィリピンで接する人たちは自ずと市民層に限られている。そのことに気づいてからは、市民／大衆という二項対立を念頭に置きながら彼らと話すとともに、大衆層に属する人たちとのコミュニケーションも試みた。具体的には墓地スラム※などを何度か訪問し、そこに住む人たちと話す機会をもった。英語が通じる場合と通じない場合があり、言葉の代わりにボディーランゲージを多用しながら伝え合ううち、互いの身体の癖のようなものを共有し合い、言葉に置き換えられないコミュニケーションを感じる瞬間も多く、興味深かった。

ノース・マニラ霊園に暮らす人たち

※墓地スラムについて
80年代のエドサ革命以降、地方の農村から首都マニラに移住してきた人々は各所にスラムを作って暮らし始めた。殊に80年代中期からは台風災害で住まいと職を失った人たちがナボタス墓地やマニラ・ノース墓地をはじめとする霊園を避難所として住み始め、その後も不法占拠を続けている。フィリピン政府は数年前から違法スラムの撤去を試み、不法占拠している人たちをマニラから離れた再開発地区に移動させようと試みてきたが、いまだにマニラの墓地には多くの人が住んでいる。マニラ・ノース墓地だけでも数千人が暮らしており、かつては１万世帯を超える家族がここに住処を持っていたと言う。
マニラ・ノース墓地はさながら一つの町を形成していた。屋根があり堅固な石造りの墓所の内部ではテレビを置いてくつろぐ人や、アールデコ調の建築資材・デザインを活用して洗濯物を干す人、墓所のすぐ裏に調理場を設けて煮炊きをする人、墓所の前に小さな店を出し水や食料を売るなど、人々の普通の暮らしを目にした。霊園内で出産する女性も少なくなく、たくさんの子供たちが墓から墓を走り回りながら暮らしていた。いくつかのNGOが子供たちを対象とした教育のボランティアや炊き出しを墓地内で行っているが、中には外の学校に通う子供もいる。しかしそれが学校内で知られるといじめや差別の原因になることも多く、彼らは決してクラスメイトたちに自分の住まいについて話さないと聞いた。墓地内での暮らしは当然家賃を払う必要がなく、水は墓地内の井戸や外部からの購入によってまかない、電気はどこからともなくラインを引き込んで使っている。その都度違法な電力ラインはテイクダウンされるが、すぐに新しいラインを引き直して“復旧”。いくつかのストリートにはカラオケができる場所やネットカフェのようなものもある。マニラの墓地スラムは、急激な経済発展と政治状況の変化を如実に反映している。

▸自分の身体で「コピー」する
「ビバ・エクスコン2018カピス」でのパフォーマンス上演に向け、フィリピンの人たちの発声や聴取方法に共通してみられる特徴、それに伴う身体性を観察・取材し続け、滞在第2期の終盤にはパフォーマンスのコレオグラフに反映できるようないくつかの要素をつかむことができた。また、第2期から第3期にかけて行ったインタビューは、ここまでに発見した身体の特徴がどのような社会状況と関連するか、なぜそのような身体性が生まれ得るのか、その裏付けを少なからず与えてくれた。身体は社会やコミュニティを反映して存在するという確信に自信が持てたと思う。
※下記は第2・3期に行ったインタビューの概要。
・マラウィのミンダナオ州立大学講師
　中央と周縁の不平等。国という大きなコミュニティとその意識共有はフィリピンにおいて可能か。地域ごとで得られる教材（量と種類）の違いが生む教育格差の是正について。
・ディタス・ベルムデス（フルーランス・ライター、元新聞記者）
　今年12月にディタスたちの編集チームが出版する書籍について。フィリピン全土の歴史的な建築を取材し、取材で得られた最も古い写真と同じアングルで撮影した現在の写真を並置して比較し、都市計画や将来的なフィリピンの景観創造についての課題と問題提起。
・メオン・カバルデ（弁護士、アムネスティ・インターナショナル・フィリピン副議長）
　現実の社会で起きる超法規的な措置や状況に応じた恣意的な法の適用に、法律の解釈を担うプロフェッショナルはどのように対処するのか。フィリピンの法体系における欠如は何か。
・キィ・エヤ（フリー・フォレスト・スクー・イン・フィリピンのファウンダー）
　都市と地方の教育格差について。家族の経済状況や宗教と合致した教育形態のオプションについて。
・レイ・ティエンポ（米資本の広告代理店ワイ・アンド・アールのディレクター）
　フィリピンの商業広告が訴求する対象は誰か。フィリピンではアートと広告の世界が比較的近いと感じるが、それはなぜか？
　アートとの親和性は広告にどのような効果をもたらすか。選挙キャンペーン期間における広告の役割。
・サル・テレグ（医師、保健省腎臓病センター勤務、神経学研究者）
　病がもたらすクオリティ・オブ・ライフの低下に対し、患者・医療機関・家族・政府それぞれがどのように連携するべきか。
　サル医師が研究するパナイ島由来のDNAのみに発生源を持つパーキンソン・ジストニアに対し、周囲の人がもつ偏見や迷信を科学者としてどのように解消していくか。

だが、これらの要素や裏付けを、実際のパフォーマンスに反映するにはどのような手法を取ればよいのかかなり悩んでしまった。しかし、ちょうどその時期運よく鑑賞できた川口隆夫『大野一雄について』フィリピン公演が活路を与えてくれた。
川口氏は、本公演へのアーティスト・ステイトメントとしてこのように述べている。「即興的な要素も含み、老齢というだけでなく特異な身体的・運動的特徴や癖までをもその本質として含んだ大野の踊り。そこに足すも引くもなく、忠実にコピーしようと努めることは、コピーを行う主体側の解釈や特性を消して、可能な限りその対象に自分を重ねようとすることに他なりません。しかし、重ねよう、寄せようとすればするほど、その重ならない部分、どうしてもはみ出してしまう部分が、逆に、その主体の存在の消すことのできない有り様を浮かび上がらせるという、「コピー」であるがゆえに「オリジナル」であるという、パラドックス。」
私は、フィリピンの人たちに共通する聴取や身体の特徴を自分の身体を通じて咀嚼し、抽象化してからステージに挙げるべきで、それが正しい制作の方向性、知り合った人たちへの敬意を表すことだと思っていた。しかし、川口さんのように、自分の身体にいくつかの要素をアダプトしたり、コピーすることによって起こる不和や差異をまず観察してみようと考えを変えた。また、コラボレーターはパナイ島に暮らすフィリピンの人たちである。その身体にフィリピンの人たちの身体的共通点を重ねたら何が起こるだろうか。しかもそ

の共通点は私というフィルターを通して掬い取られたものであり、すでにたくさんのノイズが載っている。一人のアーティストとしては丁寧に避けてきた「コピー」という行為を積極的に行うことにより、逆説的にオリジナリティを見つけられるかもしれない可能性に希望を感じた。

## 3-3 滞在第3期（10月後半～出国）

＜新作パフォーマンス『エフェメラル・ノット』の上演＞

2018年11月8日「ビバ・エクスコン2018カピス」が開幕し、様々な展示やイベントを実施しながら2019年1月末まで開催される。このイベントは1990年にヴィサヤ地方のアーティストたちが中心となって立ち上げたビエンナーレ形式のアートフェスティバルで、その名称は「The Visayas Islands Visual Arts Exhibition and Conference」の頭文字をとった略称で、「カピス」は今回の開催地であるロハス市が属する州の名称を示している。

国内外から参加した120名以上のアーティストたちが作品展示とパフォーマンスを行い、11月9日～11日の3日間に亘るカンファレンスでは50名ほどのスピーカーたちがテーマに応じたプレゼンテーションと質疑応答を行った。どのテーマにおいてもアートと政治の関係性を積極的に議論し合う場面が散見され、フィリピンらしさに溢れたカンファレンスで連日200名規模の会場はほぼ満席だった。

『エフェメラル・ノット』公演の様子

私は、10月にワークショップを行ったフィラマー大学のマル・アヨン教授の協力の下、彼の友人のアーティストや彼が主宰するアート・グループに所属する若い学生たちの中から3名をパフォーマーとして選出し、私を含む4名でパフォーマンスを行った。6月と10月にロハス市各所で行ったトークとワークショップを通じてすでに私の活動について知っている3名だったので作品への参加も快諾を得た。なお、アヨン教授の協力で同市内のデスティニー・シティー教会のロフトや教室、広い応接室をリハーサル場所として無料提供して頂いた。教会の牧師夫妻を含め、何組かの家族や若い社会人らが教会の上階に住んで様々な行事やコミュニティをサポートしており、アートへの支援も積極的に行っていた。

パフォーマンスのタイトルは「エフェメラル・ノット」、テーマは時間の非永続性。時間をテーマとする理由は、最初のリサーチで最も印象に残った、市の中心部を流れるパナイ川に起因する。この川がかなり曲がりくねっていることから河川蛇行の発生と発達について調査し「ロハス市の過去・現在・未来の地形」についてシミュレーションを行った。また、かなり汚濁した川なので流れの随所に泡が見られることから、鴨長明『方丈記』の「よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし」を連想し、時間の不可逆性と、泡のようなはかない結節点が私たちの存在そのものではないかと考えた。Ephemeral（はかなさ）とknot（結び目）という一見対照的な二つの語が並ぶのは、このパナイ川がきっかけとなっている。

3名のパフォーマーには、それぞれ＜過去・現在・未来＞のキャラクターを割り振り、まず、各々が表現する時間をどのように解釈し動きのコアにするかをディスカッションした。次に、私が6か月の間各所で行ったリサーチとコラボレーションを通じて得たフィリピンの人たちに共通する音の聞き方や視線の動かし方、体の処し方などを自分の体でコピーして見せ、どこに不和や違和感を感じるかをディスカッションし変更を加えていった。これらを枠組みとして20分弱の構成でコレオグラフを作り上げた。作品中、私は三つの時間の魂や意思のような存在として現れ、三つの時間たちは魂・意思と出会うことで一瞬、規則性から解き放たれ、自由に動く瞬間が訪れるという演出を施した。

『エフェメラル・ノット』公演の様子

あまり一般化するのは好ましくないが、フィリピンの人たちに最も特徴的な聴覚の傾向は、サラウンド聴取と選択聴取の取り合わせ（広く聴取したうえで必要な情報に応じた音声に集中する）ではなく、聞く/聞かないという明瞭なコントラストと前方に集中した聴取であると思う。この聴取傾向と、身のこなしや視線、発声の音量などはかなり連動していると思う。また、聴覚・視覚の集中範

囲が狭いことは空間認識にも関連してくる。フィリピン滞在中、ある程度の広さの地理的条件下で正確に効率的に移動したり、自分や人の現在地をある広がりとパースペクティブの中で認識し方向を示したりすることが苦手な人たちに何度か遭遇した。個人の記憶と経験が刻むマイルストーンとその経路、つまり、個人的な点と線の集積で都市の表情が構築されている ― 都市計画について取材している友人のライターが個別の建築の秀逸さとランド・デザインの欠如や脆弱性のアンバランスさについて話してくれたことが紐づいて思い返される。また、そのようにある種“オーガニック”な身体性・思考と都市のモダニティ（マニラ、および地方周縁部の都市化）とのギャップがフィリピンに住む現代人のキャラクターを形成する重要な要素であると感じた。
パフォーマーたちには、その偏向性を印象付けるように意識的にゆっくりと動いてもらい、フィリピンの人の身体で如何にフィリピンの人をコピーできるか、ということにチャレンジしてもらった。場合によってインタビュイーたちの言葉や彼らのディスカッションから得た推論や分析も、コレオグラフの裏付けとして共有した。結果、彼女たちの身体には私がコピーを試みたときに見えたような不和は現れず、コピーした特徴は彼女たちの身体と融合し増幅したように見えた。場面によっては、それを減少させるように試みるなど、融合した身体の特徴を保ったまま、どのようなパラメーターによってコレオグラフを変化させることができるか、小さな試みを積み重ねていった。

『エフェメラル・ノット』公演の様子

各パフォーマーは小さなLEDライトを小型回路につなげたものと、各々がフィルムを木枠に貼付して自作した反射板を照明小道具として使用した。前者は各人の時間のキャラクターに沿って光の軌跡を描き身体の動きを筆致のように用い、時間の視覚化や固定化を試みるために用いている。また、最初のリサーチでインスピレーションを得たパナイ川（蛇行河川）の過去・現在・未来の形状についてもディスカッションを行い、LED光で描く際のヒントとした。
後者は時間という概念が直接見えるものではなく、人や社会の営みが照射して作る反映によってようやく認識できるのではないかという考えに基づいている。反射板には、私が手持ちした小型スポットライトを当てることで壁面・床・天井・オーディエンスの身体などに反射を映し出すことができる。
なお、主要な美術としては、舞台全面に幅5m、長さ20mのパナイ川をイメージした大判の薄い白布を設置。パフォーマンスの冒頭、時計をイメージした私の声が完全暗転で鳴り響く中、過去役のパフォーマーがその布をもって現れ、未来役のパフォーマーと共に布を広げるところから作品はスタートする。一方終盤その布は3名のパフォーマーによって巻き上げられ、繭のように彼女たちを包み、作品中盤で意思があるかのように自由に動いていた三つの時間を眠らせ、従来の時間の流れの中に引き戻す、という演出・構成になっている。

終演後のオーディエンスとのコミュニケーションでは、ロハス市及びカピス州の特徴を捉えた作品だという感想が多く寄せられた。強い暗闇、静寂をかき消すトライシクルのエンジン音、突き刺すような日差しと反射光のゆらぎ、蛇行する川、一見緩やかで大らかな地方都市の時間の流れの中に隠れた人々の焦りのような感情など、現地に長く住む人たちが自分の言葉でロハス市と「エフェメラル・ノット」を描写してくれた。私たちのパフォーマンスを通じて自分の住む場所を再発見してくれたこと、自分自身と結びつけて鑑賞してくれたことを、非常に意義深く感じた。
私にとっても、複数名のパフォーマーを用いた本格的な演出・構成・コレオグラフは初めての経験だった。この機会を今後の作品制作に活かし、さらに発展させていきたいと考えている。

## 4. フェローシップ活動を終えて

今回のフェロー活動を通じて得た一番の成果は、リサーチから得た気づきを新作のパフォーマンス制作に具体的な形で反映し取り入れられたことだった。そのコミュニティに属する身体は、そのコミュニティの状況や特徴を反映している、という考えに確信はあったものの、どのようにコラボレーターたちと共有すればよいのかは最後まで悩みの種だった。川口隆夫さんの作品から学んだ「コピー」という手法は、たった半年間であれフィリピンという複雑なコミュニティに身を置き、短い間その一員として生活していた私にとって願ってもない着地だったと思う。今後も世界各地の異なるコミュニティと接し、私の身体表現を通じてそのコミュニティに属する人が自分自身を発見し、私も私自身に出会えるような作品作りを続けていきたいと思う。
なお、今後継続されるプロジェクトとしては、デ・ラ・サール大学のクレオ准教授との「データ・ビジュアリゼーションによる選挙教育教材の試作」、広告代理店ワイ・アンド・アールによる「プラスチック被害から海洋生物を保護することを企図した啓発ビデオの制作」（撮影はすでに終了し編集を待っている）がある。さらに、マカティにあるギャラリー・ドローイング・ルームが香港－マニラ－シンガポールをツアーしながら私を含む数名の日本人アーティストを紹介する企画を計画している（時期不明）。
今後もフィリピンというコミュニティとの友情関係を大切にしていきたいと思う。